

3) ベロニカ＝花虎の尾

ベロニカはキンギョソウと同じくゴマノハグサ科の多年草である。ゴマノハグサ科は世界では220属、約3,000種が知られており、熱帯から寒帯まで山林中や海岸の砂地、湿原、高山帯など、さまざまなところに自生する。その中でもベロニカ属(Veronica)は北半球の温帯地方を中心に約300種類が分布し、日本ではクワガタソウ属といわれている。その名の由来は果実の形が、兜の鍬形に似ているところから名付けられたものである。そういえばこの仲間は面白い形の種子を实らせるものが多く、春の花木の中で『花水木』の項でも取り上げたイヌノフグリもこのゴマノハグサ科に属し、やはり種子の形が和名のもととなっている。他にもグンバイヅル、別名マルバクワガタといわれている種があり、これは果実の形が軍配によく似ている。本州の中部地方、特に浅間山付近や志賀高原、美ヶ原などに分布し、淡青色の可憐な花を咲かせる。ベロニカ属ではないがこれに近いものに、トラノオ、クガイソウの仲間がある(03-05-13 トラノオの項参照)。いずれも蝶や黄金虫の仲間が蜜を吸いにやって来る植物で、日本では滋賀県の伊吹山に自生する『ルリトラノオ』を品種改良したものがよく栽培されている。ヨーロッパではヒメルリトラノオという種があり、これはヨーロッパ、中央アジア、北アジアの山岳地方に分布し、5月頃15cmほどの花穂を出して、青紫色の小花を穂状に咲かせる。日本への渡来は昭和の初めで、山野草として販売されている。

さてベロニカ属は耐寒性も強く丈夫な種で、1本植えておいても何時の間にか一群になっていることも少なくない。花は6~7月頃茎頂に総状につけ、枝はほとんど分枝することなく、高さは約60~80cmに達する。繁殖は株分けが最もよく、植え場所は陽当たりの良い肥沃な適潤地を好み、乾燥を嫌う反面、根腐れを起こしやすい。どれも決して派手な花ではないが野趣にとんでおり、一輪挿しに生けたり、茶室に飾ったりすると心休まるものがある。

ところでベロニカの由来である。伝説によれば十字架を背負ってゴルゴダの丘にある刑場に引かれて行くイエス・キリストを励まし続けた、エルサレムの女性の名前ということになっている。カトリックの祈祷文である「十字架の道行きの祈り」の中に登場し、血に染まって歩むイエスの姿を見て、群集の中から走りでてきた女性がベロニカだったというわけである。彼女はイエスの顔から流れ出る汗を自らかぶっていた亜麻の手巾(シュキン)で拭いてあげると、その布地にはイエスの顔がそのまま残っていたと伝えられている。また別の伝説によれば、彼女は長く患っていた持病をイエスに直してもらい、イエスの肖像画を描いてもらうために画家を訪ねる途中、イエスに出会い、画布を彼に渡して返してもらうと、そこにはイエスの顔が描かれていたという。ベロニカの名は聖書に名をとどめているわけではないが、この伝説からキリスト教徒の間では多くの信頼を集めており、ヨーロッパの美術作品の中でもたびたび描かれている。



ベロニカの近縁種、花トラノオは学名『*Physostegia virginiana*』である。



ルリトラノオの花に吸蜜にやってきたルリシジミ。

[目次に戻る](#)